

●第二卷

古代Ⅱ

鈴木日出男・藤井貞和 編

日本文芸史

表現の流れ

企画委員
古橋信孝
藤井貞和
林達也
山田有策
鈴木貞美
宮腰賢

日本文芸史——表現の流れ

第二卷・古代Ⅱ

鈴木日出男・藤井貞和編

初版印刷 一九八六年一〇月二〇日
初版発行 一九八六年一〇月三〇日

河出書房新社

発行人 清水 勝

東京都渋谷区千駄ヶ谷二―三二―二
電話 〇〇三三 四〇四一 八六一一 (編集)

〇〇三三 四〇四一 二〇一一 (営業)

振替東京〇一〇八〇二

印刷 凸版印刷株式会社
製本 加藤製本株式会社

装幀 戸田ツトム
編集協力 朝比奈秀一

著・編・本はおとりかえします
定価は函・背に表示しております

Printed in Japan ©1986

ISBN-309-65822-8

『日本文芸史——表現の流れ』 はじめに

ことばの生命を復権するために

本シリーズは、『古事記』『万葉集』以前から現代にいたる日本の文芸作品に関心をもつ、すべての人びとのために企画された。

文芸作品を読むとき、われわれはそれを生み出した人びとが見、感じ、考えた世界を生きる。作品を読むことによって、時代や文化を異にする他者の生を共有し、心の経験を大きく拡げることができる。

本シリーズは、読者にそのための手がかりを提供するために編まれている。

世界的規模での文明の行きづまり、精神の危機の進行が論じられる今日、われわれの現在立っているところを明らかにし、未来を切り拓くために、文化的精神的遺産の総体としての見直しが必要だが、火急の課題である。あらゆるものが情報化され、知識の断片と化するような世界は、貧血症的な世界にすぎないだろう。世界を生氣にみちたものとして取り返すために、とりわけことばの生命を復権させるために、文芸作品の息吹きをわれわれのものとするのが不可欠である。遺産は過去のものではない。われわれの前に、われわれのために等しい価値をもって現存しているのだ。

われわれが日本の文芸作品の歴史の見直しを企画し、より多くの人びとに親しみやすい形で出版しようとした根本的な目的はここにある。

文芸作品独自の生きた姿を総体として明らかにする

われわれにとって文芸の歴史とは、作品の歴史にはかならない。それは作品をめぐる歴史的事実の集積でも、作品を支えた思想の変遷でもない。ことばによって語られ、書かれ、聞かれ、読まれ、慈しまれてきた、まさに生きた作品の歴史にほかならない。

文芸作品を、その生きた姿においてとらえなおすこと、それが生まれ、受容された、そのままの姿に限りなく

近づこうと試みることに、これが文芸の歴史にアプローチするわれわれの基本的立場である。

この立場は、人間のことばによる活動の場において作品をとらえ、ことばの芸^{フツ}として考察する方法に立つことを導く。その意味でわれわれは本シリーズを『日本文芸史』と名づけた。

表現の形質を洗いなおし、流れをとらえる

われわれは作品をめぐる歴史的事実の集積や文芸思潮の変遷を追うことに終始する既成の「文学史」から訣別するとともに、作風の変化を社会の歴史の変遷から説明しようとする「文学史」の方法とも訣別する。

たしかに文芸は、社会のなかに生まれ、社会のなかに息づき、社会を反映する。が、文芸の流れは、社会の変化に還元することはできない。

表現は前の時代の様式を規範として負い、それを受けつぎ、更新し、あるいは革新して生み出される。表現の流れは、社会の歴史につきうごかされつつも、それから相対的に独立した軌跡を描くものである。

われわれは、それぞれの作品を生きた姿においてとらえるという立場から読み直し、表現の流れのなかに位置づけ直すことをもって、総体としての文芸作品の流れの記述を行った。副題に「表現の流れ」と付したゆえんである。

企画編集委員 鈴木貞美

目次

はじめに

序説

鈴木貞美
藤井貞和

この巻のためのノート

藤井貞和

第一部 古代文学の革新

概論 鈴木日出男

第一章 万葉歌の終焉から古今和歌集へ

第一節 万葉歌のゆくえ

鈴木日出男

- I 色好みの家・乞食の客
- II 古言の世界

第二節 古代歌謡の伝統——歌謡史(一)

鈴木日出男

- I 宮廷歌謡の諸相
- II 漂泊する芸能者の誕生
- 第三節 漢詩文の隆盛

鈴木日出男

- I 嵯峨朝の文壇
- II 空海とその周辺
- III 白詩の受容
- IV 小野篁と都良香
- V 菅原道真とその周辺

VI 漢詩文のゆくえ

第四節 仮名文字の成立

鈴木日出男

仮名ことばの文学

第五節 古今和歌集の表現の成立へ 鈴木日出男

- I 六歌仙の時代と表現
- II 小町・業平——六歌仙の人びと
- III 歌合と屏風歌
- IV 句題和歌と新撰万葉集——和歌と漢詩
- V 貫之と伊勢

A 紀貫之 B 伊勢

第六節 古今和歌集

I 古今和歌集の世界

古橋信孝

A 「見ゆ」から「見る」へ B 価値の否定 C 負の側からの発想 D 二元構造・見立てとその混乱 E 重層表現——掛詞・縁語

Ⅱ 古今和歌集の仮名序・真名序

66

第七節 女性仮託日記の創始——土佐日記

古橋信孝

69

Ⅰ 女性仮託とはなにか

70

Ⅱ 土佐日記の表現世界

72

第二章 物語文学の開始と十世紀和歌・日記文学

日記文学

75

第一節 物語文学の源流

藤井貞和

75

Ⅰ コト・フルコト

76

Ⅱ 物語文学の機運

78

第二節 初期物語文学の出現

藤井貞和

81

Ⅰ 竹取物語の誕生とその世界

82

A 成立をめぐって B 物語の展開 C 物語の主
題 D 文体と語源譚

Ⅱ からもり・はこやのどじと物語文学の見通し

88

A からもり・はこやのどじ B 十世紀物語文学の
見通し

第三節 後撰和歌集の前後

日向一雅

91

Ⅰ 後撰和歌集の特質

92

Ⅱ 後撰和歌集時代の私家集

94

A 伊勢集 B 一条摂政御集 C 本院侍従集

Ⅲ 曾禰好忠・源順・源重之

A 曾禰好忠 B 源順 C 源重之

96

Ⅳ 天徳四年内裏歌合

Ⅴ 大斎院前の御集

第四節 歌物語の展開

日向一雅

Ⅰ 伊勢物語

A 成立について B 伊勢物語の世界 C 伊勢物
語の文体

104

Ⅱ 大和物語

A 構成と内容 B 表現の性格

108

Ⅲ 平中物語

A 日常性の世界 B 平中物語の位相

111

第五節 事実と虚構とのあいだ

日向一雅

Ⅰ 篁物語

A 内容 B 方法

118

Ⅱ 多武峯少将物語

A 内容 B 方法

120

第六節 己が人生史を書く——蜻蛉日記

鈴木日出男

蜻蛉日記

A 構成と成立 B 内容

124

123

第二部 源氏物語の時代

概論 藤井貞和

129

第一章 長編物語の時代

第一節 長編の出現——宇津保物語

藤井貞和

133

I 物語作者は誰か

吉田真由美

177

II 物語の出發・その状況

180

III 物語はどこへ行く

原岡文子

183

IV 音楽の物語と作者・読者

140

第二節 成人儀礼と物語——落窪物語その他

藤井貞和

143

I 落窪物語の成果

144

II かくれみの・散佚物語

原岡文子

189

第三節 源氏物語の世界(一)

藤井貞和

190

I 源氏物語の成立

151

II 源氏物語の内容

154

A 正編 B 続編

第四節 源氏物語の世界(二)

藤井貞和

163

I うちなる物語史

164

II 引用の方法

166

III 構造と時間

168

IV 批評・コミュニケーション・宗教

172

第五節 源氏物語と歌謡——歌謡史(二)

吉田真由美

178

I 催馬楽

II 朗詠の流れ

第六節 日記と人生

I 紫式部日記

A 成立をめぐって B 物語の作者として C 求道の思い

184

II 紫式部家集

187

第七節 源氏物語の影響——引用される文学

原岡文子

189

源氏物語と更級日記

第二章 人生と和歌と漢詩と

第一節 宮廷社会と人生——枕草子 鈴木日出男

193

I 清少納言

194

II 枕草子の世界

196

第二節 詩歌の美学

鈴木日出男

201

I 村上・一条朝の詩文

202

II 文人群像

204

第三部 源氏物語以後

Ⅲ 和漢朗詠集の世界——漢詩と和歌	206
Ⅳ 拾遺和歌集の時代と和歌表現	207
Ⅴ 藤原公任	209
Ⅵ 赤染衛門・相模	210
Ⅶ 能因	211
第三節 人生の鮮烈を歌い綴る——和泉式部	213

鈴木日出男

213 211 210 209 207 206

第一章 物語の享受・改作と創造

第一節 物語の環境

高橋 亨

Ⅰ 更級日記と物語

A 物語読者の回想 B 表現の主体

232 231

Ⅱ 六条斎院物語合

Ⅲ 絵のコミュニケーション

第二節 後期物語群像

高橋 亨

Ⅰ 狭衣物語

A 主題と構造 B 引用の美学 C 作者と異本

240 239

Ⅱ 浜松中納言物語

A 主題と構造 B 表現の文法

243

Ⅲ 夜の寝覚

A 主題と構造 B 心の表現法

246

第三節 短編物語とはなにか——堤中納言物語

高橋 亨

Ⅰ 堤中納言物語の世界

A 短編の手法 B 短編物語の世界

254 253

Ⅱ 表現史の位相

第四節 平安末期物語から鎌倉物語へ

高橋 亨

Ⅰ 有明の別れ

Ⅱ あさが露

第五節 古本の改作

高橋 亨

Ⅰ とりかへばや

Ⅱ 住吉物語

第六節 批評としての物語

高橋 亨

269 268 266 265 264 262 261 256

概論 藤井貞和

227

Ⅰ 和泉式部の生涯と和歌	214
A 和泉式部の生涯 B 和泉式部の和歌	
Ⅱ 和泉式部日記の世界	217
第四節 女流日記文学の継承	221
Ⅰ 成尋阿闍梨母集	222
Ⅱ 讃岐典侍日記	223
Ⅲ 建礼門院右京大夫集	224

鈴木日出男

- I 無名草子の物語批評
- II 散佚物語をめぐって

第二章 後期和歌と歌謡

第一節 後期和歌の推移

久富木原玲

I 後拾遺和歌集と藤原通俊

- A 珍しさへの志向
- B もうひとつのざれ歌
- C 和歌史の屈折点

II 難後拾遺抄と源経信

III 堀河院百首

IV 源俊賴の活躍

- A 論難の時代——俊賴の立場
- B 歌論と歌実験

V 金葉和歌集の特異性

- A へ軽々なる哥への撰入
- B 和歌と連歌とのクロ
- スオーバー

第四部 乱世にむかう貴族と民衆

第一章 歴史とはなにか

第一節 歴史物語前史

関根賢司

I 六国史から歴史物語へ

II 作り物語から歴史物語へ

第二節 歴史物語の祖——栄花物語

関根賢司

I 栄花物語・正編

312 311 310 308 307 307

- VI 詞花和歌集と藤原顕輔
- VII 藤原清輔とその和歌観

- A 奥義抄と袋草紙——和歌の存在証明
- B 清輔と誹諧歌

VIII 藤原俊成の文学

- A 歴史意識と天台止観
- B 幽玄と物語取り

IX 千載和歌集

第二節 今様のこころとことば——歌謡史(三)

馬場光子

I 今様の表現構造

- A 梁塵秘抄——こゝろの悲しき
- B 今様の二重構造——集団性と個別性

II 今様の表現

- A 類型表現
- B 物は尽し

282 280 279 278 276 275 275 272 270

概論 藤井貞和

303

II 栄花物語・続編

第三節 世継の流れ

I 大鏡

II 今鏡

第四節 軍記物の胎動

I 将門記

関根賢司

兵藤裕巳

324 323 320 318 317 314

299 296 295 291 289 286 284

- Ⅱ 陸奥話記
Ⅲ 盲僧のうごき

329 328

第二章 説話・宗教・パフォーマンス

331

- 第一節 宗教とパフォーマンス 森 正人

331

- Ⅰ 三宝絵の述作

332

- Ⅱ 勸学会の実修

333

- Ⅲ 往生要集の述作

334

A 源信の宗教活動と著述 B 往生要集の世界

- Ⅳ 法華経の靈驗の記録

336

- 第二節 学問家と往生伝

森 正人

339

- Ⅰ 学問家の歴史

340

- Ⅱ 慶滋保胤の文学

342

- Ⅲ 藤原明衡とその述作

344

A 明衡の生涯 B 明衡の著作

日本語の流れ

宮腰 賢

巻末

- ⑥ 平仮名の成立

74

- ⑦ 和文日記の創始

128

- ⑧ 和文体の完成

176

- ⑨ 歴史物語の手法

226

- ⑩ 説話文学の文体

369

歌番号索引

主要索引(人名・作品名・事項)

執筆者紹介

- Ⅳ 大江匡房とその述作

346

A 匡房の生涯 B 匡房の著作

- V 拾遺往生伝・その他の往生伝

348

- Ⅵ 漢詩文集

349

- 第三節 説話の季節の到来

森 正人

351

- Ⅰ 今昔物語集の世界

352

A 成立 B 構成 C 説話と表現 D 表現と編纂

- Ⅱ 百座法談聞書抄と打聞集

358

A 百座法談聞書抄 B 打聞集

- Ⅲ 古本説話集

360

- Ⅳ 縁起と絵巻

361

- 第四節 芸能者と宗教者——中世へ

藤井貞和

363

- Ⅰ 田楽と猿楽

364

- Ⅱ 唱導・絵解き

366

日本文芸史 第二卷
古代Ⅱ

序説

われわれは古典語を書くことをしないし、古典語で考えることもしない。古典文学を読む場合、それを注釈などを通して現代語に向きあわせ、現代語の思考をくぐらせることによって理解に到達する。そうであるからこそ、古典の世界はつねに、われわれ現代人にとつての対話の相手となり、現代という社会に生き続けるものとなる。文学史はその意味でたえず更新されなければならないものであり、現在から未来へ向けて大きく開かれた情報としてある。

平安時代の文学は最も親しまれ、よく読まれてきた古典であったといつかまわないだろう。なぜ平安時代の文学は各時代に愛好され続けて今日に至ったのであろうか。いろいろな理由はあるけれども、なによりも平安時代人自身が、文学を通してものを考えることを習慣とし、あるいは文化一般の価値を十分に大切にしてきた、というところに第一の解答が求められよう。のちの時代の人びとは、平安文学を、己らの思考と文化とを賭けて対話するに値する世界であるとして尊敬し、格闘し、そこから多くのことを教えられてきたのであった。

「平安」という名が象徴するような一種の鎖国状態のなかで、ある期間ながら平和主義的な国家が現出したということも、古今東西に例を見ないことであって、そのことも、この時代を魅力ある王朝美の世界とみなし、後世の人びとが慕いあがれ続けてきたことの一つの理由であった。

ともあれ今日においても、古典文学の代表は、しばしば平安時代に生まれた作品のうえに求められ、教科書のたぐいなどはこれらを中心にして編まれる。平安時代の文学は、最も生き生きと現代に息づいている古典である、ということができるかと思う。

第一部 古代文学の革新

平安時代の文学をほぼ三期に分けるとすれば、「第一期」は延暦一三（七九四）年の平安遷都から十世紀前半代までで、本巻の「第一部 古代文学の革新」は、ほぼこの時期に相当する。

この時期は「王朝文学の開花」期というべき百数十年で、ピークは十世紀初頭に訪れた。仮名文字の創始とともに、最初の勅撰集である『古今和歌集』が編まれ、同時代およびそれ以降に深い影響を与えた。それは、平安美学の基礎を作り出したと称しても過言ではない。物語文学の出現も九世紀末から十世紀初頭にかけてで、『伊勢物語』や『竹取物語』が作られた。その延喜年間（九〇一〜九二三年）は、菅原道真・紀長谷雄・三善清行ら九世紀の詩文や漢学を担った重要な人びとが、左遷先で、あるいは失意のうちに没した時期でもあった。概して第一期は、九世紀代の詩文や漢学の隆盛から王朝文学の開花への劇的なシフトを見せる、文学史上の興味深い時期だといえることができる。

平仮名・片仮名という仮名文字の創始は、日本文学の古代を前期と後期とに分かつ一大事件だった。平安時代の文学は、文字の自由な使用があつて初めて可能になったのだといえる。

第二部 源氏物語の時代

平安時代の文学の「第二期」は、十世紀後半代から一一世紀前半代までの約百年であるとする。と、本巻の「第二部 源氏物語の時代」は、ほぼこれにあたる。この時期は『蜻蛉日記』を境目にして始まると言いたい。この日記は真の女流日記文学の最初であるばかりでなく、女性により長い散文が書かれたはじまりでもあつて、この精神伝統は紫式部らに受け継がれてゆく。

この時代のピークはいうまでもなく一条天皇の治世（九八六〜一〇一一年）で、『枕草子』『源氏物語』『紫式部日記』『和泉式部日記』他が生み出された。『源氏物語』以前の作品である『宇津保物語』『落窪物語』もこの時期に入りたい。「王朝文学の達成・展開」の時期、とても名づけることができるであろう。

この時期はとくに、女流文学が隆盛になる。

女流文学とは女性の手になる文学に違いない。「流」とは流派または類を意味し、女性を一類と見ての、近代以降にあらわれた概念で、けいしやう 秀文学とも言った。女性には特有の繊細さや情熱があると思なして特立させたジャンルというべきか、だから男性文学というジャンルはない。西洋においては、ルネサンス期以前に名の知られる女性文学者はきわめてまれで、それが隆盛になったといえるのは一九世紀以降の今日のことに属する。中国もまさにそのとおりであった。それなのに日本で、古代に属する平安時代に、一一世紀初頭をピークとする特異な女流文学の隆盛が見られたことは、十分注目し値する。これ以前にも『万葉集』にさのの おとがみの おとめ 狭野弟上娘子や大伴坂上郎女など女性歌人の活躍があった。

十世紀から一二世紀にかけて『蜻蛉日記』『枕草子』『源氏物語』『紫式部日記』『更級日記』『栄花物語』などの著述が次ぎに女性の手によって書かれた。小野小町・伊勢ら初期の歌人の存在もさることながら、『源氏物語』の時代には和泉式部という天性の歌人が出て王朝和歌史を彩っている。『源氏物語』以降の物語文学（『狭衣物語』『夜の寝覚』など）も多く女流の手になる文学であった。

なぜ女流文学が隆盛したのか。それは一つに、複数の宮廷サロンがいくつか競いあつて研鑽につとめたということがある。しかしそればかりではない。女性の地位の高さと、その反面、きわめて不安定な状況に置かれていたことが、彼女たちの内省化を促進したのだといわれる。平安時代の女流文学は別に女房文学ともいわれるように、多く受領層の出身者が侍女（女房）となつて出仕し、それを担った。受領層は地方官として地方に出て蓄財し、勢力を誇ったが、また一方で、みずからも所属する貴族階級の将来的運命を地方にいていち早く感受することができたろう。受領層に生い育った彼女たちには、宮廷社会を絶賛し、王朝の美学の殉教者たらんとした気配さえ感じられる。だがそのことによって深く憂いに満ちた内奥の眼を豊かに成熟させ、みずからを堅固な文学者に仕立ててゆくことになった。

第三部 源氏物語以後

「第三期」は一一世紀後半代から一二世紀末（平安時代の終わり）までで、「王朝文学の爛熟」期であるとともに中世にも向かうという面をあわせもった時代である。諸文化が複雑化してゆく時期で、これを叙述上二分し、「第三部 源氏物語以後」と、それに平安時代全体を視野に入れた「第四部 乱世にむかう貴族と民衆」とに構成した。

物語文学は量産態勢にはいり、多くの女性作者がわれもわれもと制作を競う。傑出した『源氏物語』以降を物語たちはどう生き延びるか、表現史的に興味は尽きない。

和歌は中世的な幻界への模索を開始し、一方に歌学が盛んになってゆく。歌学は説話の世界とも深い交渉を持つ。

歌謡はあらゆる時代・時期を通して、けっして衰亡することなく歌い継がれてゆく性質を特徴としてもっている。本巻では三回に分けて歌謡史の叙述を試みた。最も重要な『梁塵秘抄』はこの「第三期」に属するが、「乱世にむかう貴族と民衆」の部に置くほうがよりふさわしかったかもしれない。

第四部 乱世にむかう貴族と民衆

「第三期」はまた歴史書や歴史物語が大いに編まれ、「歴史とはなにか」が沈思された時期でもあった。王朝文化の栄光を尽きぬ思いで振り返ることく、『栄花物語』が、『大鏡』が書き継がれる。

この時期は、説話文学が、本格的な到来を告げたときでもあった。説話文学はそれだけで孤立しているのではなく、学者や学問家の活躍、宗教者たちの実践活動、身体表現をともなう芸能その他の様々な新ジャンルの浮上という、変革期の状況と一体不可分なものとして存在している。

時代はすべての人びとを巻き込みながら、新しい文化価値創造の時代へなだれこんでゆく。

この巻のためのノート

本巻は平安時代の文学を取り扱う。歴史家が平安時代という場合、西暦七九四年の平安遷都以降、一二世紀末の源平動乱を経て源頼朝が鎌倉幕府を開く時までの、ほぼ四〇〇年間を指す。

ところで、本巻の前に位置する『日本文芸史』第一巻は「古代Ⅰ」と称し、その中に、これまでの文学史の常識を破るというてよい「オキナワとアイヌの文芸」と名づけられるパートを設定した。これを本巻がどう継承するかについて一言しておかなければならぬいだらう。

「オキナワとアイヌの文芸」のパートは、琉球諸島あるいは南西諸島といわれる地域に今日に残る口承的歌謡のたぐいや無文字的なアイヌの文学を、『万葉集』や『古事記』『日本書紀』歌謡と並立させ、そこに、新しい、古代、の見方を提示しようとするものになっている。

アイヌ文学は今日まで無文字のプリミティブな文学形態を貫き通した。いってみれば、古代前期の相貌を良好に残して豊かな文学遺産をわれわれにもたらしている。

琉球文学のほうは一五世紀後半代に、仮名文字を移入して古代後期に突入したと判断してよい。日本本土の歴史時代という南北朝時代頃に、沖縄地方は按司時代から三山分立時代へ移行し、一五世紀にはいり、ようやく統一王朝の形態を整えてきた。尚真王（在位一四七七～一五二六年）は中央集権制度を断行し、文物が大いに興った。一五三一・一六一三・一六二三年と三回にわたり『おもろさうし』二二巻が編纂されたのは刮目すべきことだった。一六〇九年の島津入り以後、沖縄社会はしだいに近世化してゆくが、一足飛

びに変化するわけではなく、一八世紀にはいってもなお王朝文化の色彩が濃厚である。

このように古代（前期・後期）はいろいろな時代、いろいろな民族や地方に複数に存在しているということを述べておきたい。

われわれは本巻において、古代後期を平安時代にはりつけて絶対化するのではなく、あくまで平安時代を古代後期のサンプルの一つとして叙述しようとしている。すべてを語り尽くすことはできないから、主に王朝びとの活躍に的を絞って、以下その絢爛たる絵巻を見てゆくことにしようというのであり、あくまでも複数の古代のなかの一つのサンプルとしての文学史であるという観点を強調したい。必要な限りでいつでも王朝文化から下降し、その外に出て、いくつもの古代にわたっての叙述が試みられなければならない。

本巻が、たとえば歌謡を重視したり、第四部に見られるような武者の文芸、芸能者の活躍などへの視線を怠らないようにしたのは、右のような観点に基づく。

平安時代の文学は前代と比較にならないほど複雑に多様化した。前代と同じような規模で叙述してゆくと、それこそ何巻あっても足りないということになりかねない。取り上げる作品を重点的に絞りこまなければならない点について読者の理解を賜わりたいと思う。本巻は、時代の特徴をむしろ大胆なまでに強調した傾向をもち、流動化の著しい平安時代文学の研究状況を一旦つなぎとめる新しい文学史だが、研究の進展とともにまた急速に解体させられ、より新しい文学史の試みへと再編されてゆく運命にある。